

日本語可能文における「発見のタ」と格標示

小林 亜希子 (島根大学)

akiko.kobayashi.2005@soc.shimane-u.ac.jp

1. 発見のタとガ可能：データ

-ヲ可能とガ可能

(1) a. 太郎は フランス語 {を/が} 話せる。¹

b. 昨日のビアパーティでは好きなだけ酒 {を/が} 飲めた。

(2) 「発見のタ」→ ガ可能のみ OK

(3) a. (仏字新聞を読んでいる人に向かって) へえ、君はフランス語{*を/が} 読めたんだ。

b. (太郎が飲んでいる姿を見て) 太郎は ウィスキー{*を/が} 飲めたのか。

- 「発見のタ」の意味: 「ハッと気づく」

(4) 発見の「…タ」は、発話時直前において観察された状態 p を、発話時における同一の状態 p から切り離して独立に叙述することにより、発話時以前に観察行為があったことを暗示する表現である。 (井上 (2001: 145))

-過去の可能性を表す文にも「発見のタ」は付くのか?

(5) a. 試しに袖を通してみたら S サイズの服 {??を/が} 着られた。

b. ネットで注文したら簡単に チケット {??を/が} 買った。

c. 徹夜で頑張って、なんとか レポート {??を/が} 書けた。

d. 回線が復旧して、やっと メール {??を/が} 送れた。

e. 親に頼んでみたら、簡単に お金 {??を/が} 借りられた。

f. 昨日のコンサートでは 素晴らしい演奏 {??を/が} 聴けた。

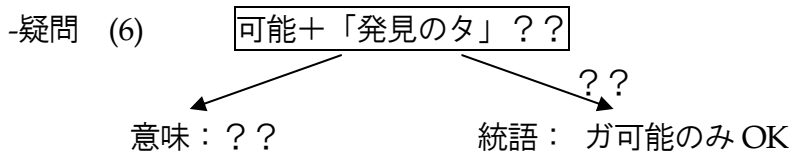
g. 昨日は快晴だったから いい写真 {??を/が} 撮れた。

「やってみたら
できた」

↓

「できることに気
づいた」ニュアンス
あり?

¹ ヲ・ガ可能の使い分けについては、意味論・語用論の立場からさまざまに論じられてきた。例えば、牧野 (1978, 1996)によると、人為性の低い行為ではガ可能の方が好まれる。その他、動詞のタイプ (知覚・認識>ガ, 漢語>ヲ), 完結性 (telicity) (過去否定・「～てしまった」>ヲ), 述語動詞と目的語の距離 (遠>ヲ), 情報構造 (強調>ガ) 等の要因も格フレームに影響するとされる (cf. 入江 (1991), 青木 (2008), 柴谷 (1978), 久野 (1973))。しかし、これらが示すのは、さまざまな可能文を量的に分析した場合に見られる「頻度・傾向」である。個々の可能文を派生するとき、どういう制約・規則がその格フレームを決めるのかといった質的研究は、管見では未だなされていない。実際、三原 (1994: 139) は「結局のところ、どの述語がどの格パターンを取るかについては、述語ごとにレキシコンで指定しておく他はない」と結論する (三原・平岩(2006: 181) にも同様の記述がある)。



2. 発見のタ

2.1. ムード表現としての発見のタ

-「叙想的テンス」(寺村 (1984))

(7) a. 発見： ああ，こんなところにあつた。

b. 想起 (思い出)： そうだ，明日は休みだつた。

c. 確認： 君は確か岡山の出身だつたね。

d. 命令： さあ，行つた，行つた。

e. 判断の内容の仮想： 早く帰つたほうがいいよ。

f. 反事実性： 僕に財産があつたなら，何でも買ってあげられるのに。 (益岡 (2000: 23))

→ 話し手の何らかの態度 (国広 (1967))，話し手の想起・発見というムード的意味(工藤 (2001))，

2.2. 共起する述語の制約

- | | | |
|-----------------------------|--------|--------------------|
| (8) a. あ，[あつ]-た。 | [存在動詞] | (益岡 (2000: 24)) |
| b. あら，[頭が痛かつ]-たんですか。 | [形容詞] | (工藤 (2001: 21)) |
| c. おや，君は，[甘党だつ]-た のか。 | [名詞] | (Ibid.) |
| (9) a. やっぱり [[ここに落ち]-てい]-た。 | [テイル] | |
| b. あれっ，[[雨が降つ]-てい]-たのか。 | [テイル] | (益岡 (2000: 25-26)) |

(10) 発見のタの用法においては，述語は状態的なものであると言ってよい。 (益岡 (2000: 29))³

-制約の説明

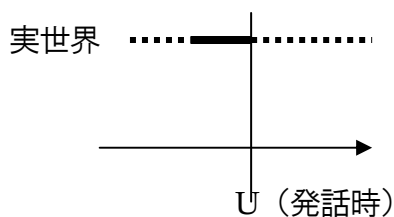
(11) ミクロ探索は一瞬で行われるので，一回のミクロ探索で得られる情報はそう多くない。

発話直前に或るモノを発見した場合，発話直前のミクロ探索で得られる情報は，ごく基本的な情報にかぎられると考えても不自然ではないだろう。[···] 文型の制約はこれを反映したものと考えることができる。 (定延 (2004: 23))

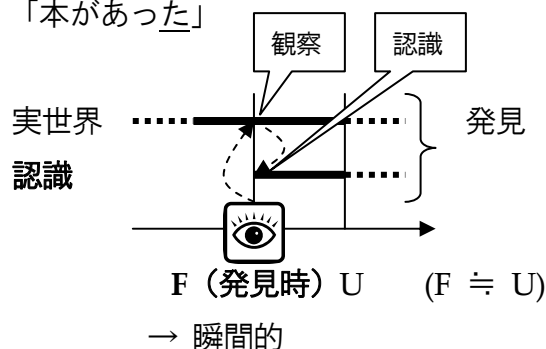
² 「テイル」は，「動きを状態として表す」ものである (日本記述文法学会編 (2007: 27))。「状態」にはいくつかの種類があるが，(9a, b) の「テイル」はそれぞれ結果状態と進行中を表す。

³ 寺村 (1984: 107)，町田 (1989: 88)，森田 (2002: 276)，工藤 (2001) にも同様の指摘あり。定延 (2004: 28) は，赤ん坊が笑うのを見て「あ，笑つた」のように言うときの「タ」も発見のタと見なし，(10) の一般化は必ずしも当てはまらないと主張するが，益岡 (2000)，井上 (2001) はこれを「発見のタ」とは別物であるとしている。

(12) a. 「本がある」



b. 「本があった」



2.3. 過去の特定時における発見のタ

- 現在成立する命題 + 「タ」 → 発見のタ ※逆は必ずしも真でない！

- 井上 (2001: 138): 「過去命題 + タ」でも「発見」のニュアンスを感じさせるものがある。

(13) (今日太郎からもらったCDを聞きながら、日記を書いている)

今日太郎からCDをもらった。(見たら) ベートーヴェンの「第九」だった。

(14) CDをもらった。→ もらったCDを見た。→ 「ベートーヴェンの『第九』である」という状態が観察された(「ベートーヴェンの『第九』である」ことが分かった)。

→ 「発見の「…タ」とはいえないが、本質的に同じメカニズムにささえられていると見られる」⁴

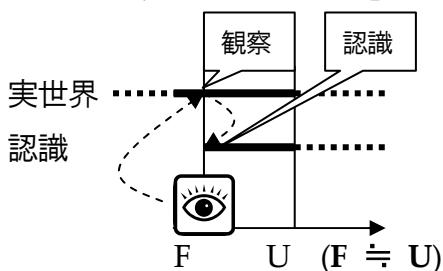
- [提案] 「過去のタ」と「発見のタ」は両方現れるが、出力されるときに前者が消去される。⁵

(15) a. [現在命題 + 発見のタ]: あれ, [ModP [TP 雨が降っている] た] のか。

b. [過去命題 + 発見のタ]: 行ってみたら, [ModP [TP 門があいていた] た] 。

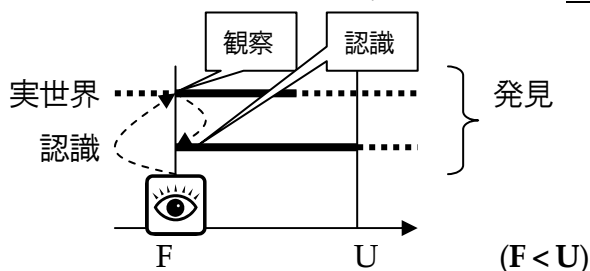
(16) a. (目の前の発見を述べて)

「あ、(本が) あった」



b. (過去の発見を述べて)

「昨日行ってみたら、(本が) あった」



- 過去において成立した命題に発見のタが付く場合も、その命題は状態的でなければならない。

(17) a. * (行ってみると) 門はだいぶこわれた → OK こわれ-てい-た

b. * (10年ぶりに花子に会ったら) 花子は太った → OK 太っ-てい-た

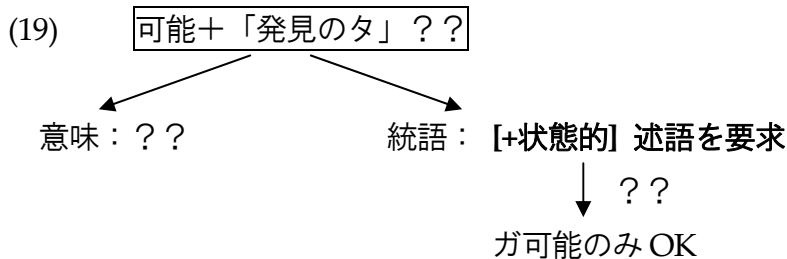
⁴ 高橋 (1985: 291-292) にも同様の指摘あり。しかし、高橋も観察時が発話時から離れると「発見性」よりも「過去性」が高まると述べているので、過去の命題に付くのは「発見のタ」と見なしていないようである。

⁵ 「想起(思い出)のタ」をデータに、加藤 (2009) も同様の主張をしている。

-まとめ

(18) 発見のタ

- a. 意味： 発見（「見たら…だった」＝「観察 → 認識」）のあったことを表す。
- b. 統語： (i) 発見時は発話時とほぼ同時でも、発話時以前でもよい。
(ii) 発見のタは [+状态的] 命題に付かねばならない。



3. 2タイプの実現含意： 「できるからやった」のか、「やったからできる」のか

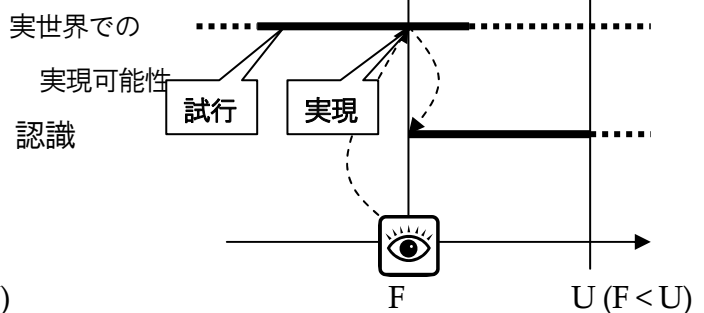
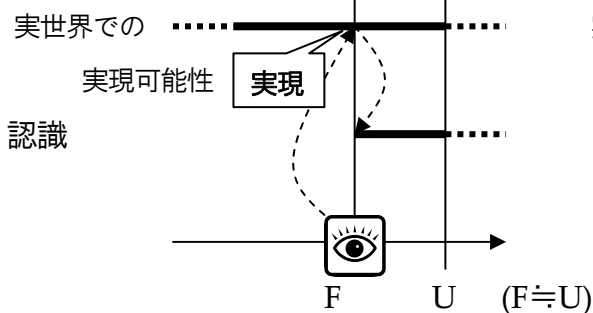
-[確認] ヲ可能・ガ可能とも、それ自体に「実現」「非実現」の含意はない

- (20) a. 昨日は ビールを 飲めた だからたくさん飲んだ [実現]
- b. 昨日は ビールが 飲めた しかし我慢した [非実現]

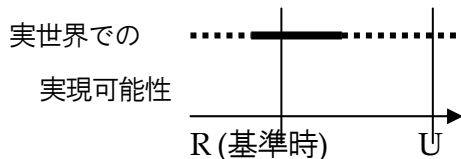
-ヲ・ガいずれの可能文も容認する文脈と、ガ可能のみ容認する文脈を比べてみる

- (21) a. 昔はやせていたので、卒業式ではこのSサイズの服 {を/が} 着(ら)れた。
- b. 先月、試しに袖を通して見たら、このSサイズの服 {??を/が} 着(ら)れた。
- (b) の方は、「やってみたらできた」という意味の可能を表す。 (cf. (18a))

- (22) a. 「へえ、君はフランス語が読めたんだ」 b. 「袖を通して見たらSサイズの服が着られた」



- c. 「昔はやせていたから、Sサイズの服が着られた」



- (21a), (21b) の意味的な違い：

(a): [行為者の自覚：実現可能性（体型・許可証）満足]（→ [試行・実現：S 服着用，撮影]
→ 「できるからやった」（「できるけどやらなかった」）

(b): [試行・実現：S 服着用，撮影] → [行為者の自覚：実現可能性（体型・撮影条件）満足]
→ 「やったからできる」 必然的に実現が含意される。

-議論：もし，(21a, b) の「タ」がともに「過去のタ」ならば，どうして (b) ではヲ格標示が許されないのか，説明できない。

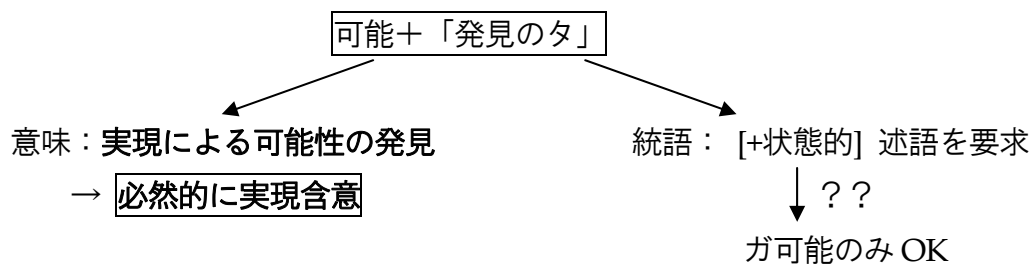
∴ (21b) は，可能文に先行する文脈から，「実現含意」が期待（暗示）されるが，ヲ可能は「実現含意」の文脈でも問題なく使われる (cf. (20a, b))。

-まとめ

(24) 可能文に現れる「発見のタ」：

- a. 意味：「見ると…できている」「やってみたら…できた」。必然的に実現を含意する。
- b. 統語：ガ可能のみ容認する。

(25)

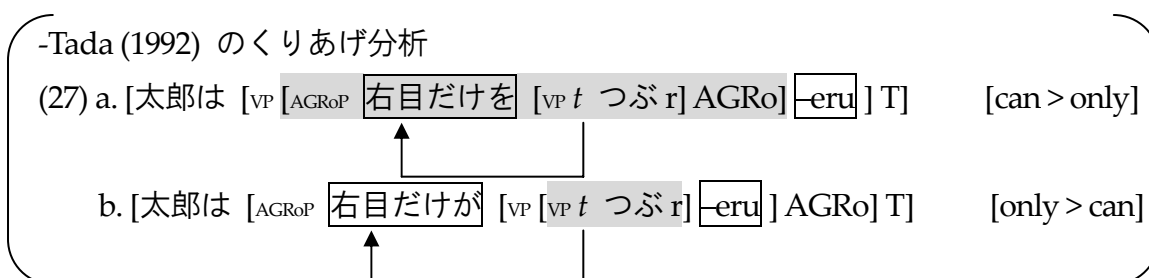


4. 可能文と状態性

4.1. 可能文の統語構造: Tada (1992), Takano (2003)

(26) a. 太郎は右目だけを つぶれる。 [can > only, ?*only > can]

b. 太郎は右目だけが つぶれる。 [*can > only, only > can] (Tada (1992: 94))



-Takano (2003)の予期的分析 (pp.800-801 より改変)

(28) a. [太郎₁は [VP [VP PRO₁ 右目だけを つぶ r] -eru] T] [can > only]

項として選択

b. [太郎₁は [VP 右目だけ₂が [VP [VP PRO₁ pro₂ つぶ r] -eru]] T] [only > can]

Aboutness による叙述

-Takano 分析を支持する証拠:

(29) 私はドイツ語が、流暢に話す人を探せる。 (Ibid. p. 809)

a. Tada: 私は [AGROp ドイツ語₁が [VP [VP [DP [RC t₁ 流暢に話す] 人]-を 探 s] -eru] AGRo]

CNPC 違反...と予測

b. Takano: 私は [VP ドイツ語₁が [DP [RC OP pro₁ 流暢に話す] 人]-を 探 s] -eru

基底生成

(30) 私は メアリーが その仕事を 任せられる。 (Ibid. p. 811)

a. Tada: 私は [メアリー₁が [VP [AGROp その仕事₂を [VP t₁ t₂ 任せ] AGRo] -rareru]]

二格を持つので移動不可...と予測

b. Takano: 私は [VP メアリー₁が [VP PRO pro₁ その仕事を 任せ] -rareru]

基底生成

4.2. Aboutness 叙述文の制約

-Aboutness 関係によって節構造が成立する場合: その他の例 (三原・平岩 (2006: 190))

(31) a. 太郎が、背が高い。 [多重主語構文]

b. 私は花子を、天才だと思った。 [ECM/RTO 構文]

4.2.1. 多重主語構文(MSC) 2 タイプ: S(tative)-MSCs vs. N(on)S(tative)-MSCs

-Takahashi (2007) による MSC 下位区分とその構造分析:

(32) a. S-MSC: 太郎が 妹が きれいだ。

b. NS-MSC: (?)太郎が 妹が 結婚した。 (Takahashi (2007: 26))

(33) a. S-MSCs: [CP 太郎₁が [TP t₁ [VP [AP 妹がきれい] t_v] t_T] だ-T-C]

↑ TP-Spec に基底生成, aboutness による VP との関係づけ

b. NS-MSCs: [TP 太郎₁が [T [t₁ 妹が]₂ [VP t₂ 結婚した] T]]

↑ 述語項 NP2 から抽出移動

-証拠:

- (34) a. ジョン₁が 父₂が 自分*_{1/2}の 息子に 厳しい。
b. ジョン₁が 妹₂が 自分_{1/2}の 部屋で 殺された。 (Ibid. p. 27)
→ S-MSC: 大主語は「自分」の先行詞になれない (←統語的θ関係がない)
- (35) a. あの店が 食中毒事件が 多い。 (Ibid. p. 28; 一部改変)
b. *あの店が 食中毒事件が 起こった。
→ NS-MSC は副詞的な大主語を持ってない (← 対応する基底構造が不可)
- (36) a. 週末が どこでも 宴会が 多い。
b. *太郎が まちがって 妹が 人をはねた。 (Ibid. p. 29)
→ NS-MSC: 2つの主語の間に付加詞が入れない (←移動制約)

-つまり…

(37) 大主語と述語句が aboutness によって結びつくなら, その述語句は必ず [+状态的]である。

4.2.2. ECM/RTO 構文

-Takano (2003) の予期的分析

(38) 私は [VP メアリー₁を [V [pro₁ 天才だと] 信じてい]] る。 (adapted from Takano (2003: 802))
Aboutness による叙述

-Hiraiwa (2007) データを考慮して修正⁶

(39) 私は [[sc メアリー₁を [pro₁ 天才だと]] 信じてい] る。
Aboutness による叙述

↓

-ECM/RTO 構文「(主語) は X を Y と 思う/信じる」において,
X と Y が aboutness によって叙述関係を作る。

-予期的 (基底生成) 分析を支持する証拠

- (40) a. メアリーは [3人の学生₁を [pro₁ 全ての先生に t₁ 紹介されるべきだと] 思ってい] る。
[3人 > 全て, *全て > 3人]
b. みんなは [メアリー₁を [[DP [RC [e]₁ 話す] 言葉]-が 上品だと] 思ってい] る。
島を越える依存関係

(adapted from Takano (2003: 807, 809))

⁶ Hiraiwa (2007) は別の分析を提案しているが, 長距離格付与の前提が必要であるなど問題があるため, 従わない。

-Hiraiwa (2007) データ

(i) NPI 「誰」は、表層位置において、認可子「モ」から支配されねばならない。⁷

(41) a. 太郎は [DP **誰が** 書いた論文]-も 読まなかった。

b. ***誰が**₁ [vP **t₁** 花子を責め]-も しなかった。 (adapted from Hiraiwa (2007: 97))

(ii) ECM/RTO 主語は埋め込み節 に付加した「モ」に支配される = これらは1つの構成素を成す

(42) 太郎は [**誰を** 馬鹿だと]-も 思わなかった。 (adapted from Ibid. p. 101)

-Y の意味的制約

(43) a. 佐々木 (2009): X を Y と 思う (Y = 名詞+だ, 形容詞, 形容動詞)

b. Harada (2002: 238): Subject raising in Japanese is only possible with an raising predicate with an adjective or an adjectival noun as its embedded predicate. (下線引用者)

(44) a. *太郎は 花子を [東京にバスで行くと] 思う。

b. *太郎は 花子を [昨日東京に行ったと] 思う。

-つまり…

(45) a. ECM/RTO 構文「(主語) は X を Y と 思う/信じる」の X と Y は aboutness により関係づけられる。

b. Y はかならず [+状态的] である。

4.3. 「やったからできる」タイプの可能文における義務的ガ格標示

(46) a. 日本語において、aboutness によって叙述形成がなされるとの分析がある構造：

(i) ガ可能 (ii) 状態述語の多重主語構文, (iii) ECM/RTO 構文

b. (ii), (iii) いずれの場合も述語句は [+状态的] である。

↓

(47) a. (46b) が偶然でないと仮定： aboutness 叙述は主語と [+状态的] 述語句の間で形成される。

b. 帰結： (i) ガ可能においても、ガ目的語と 叙述関係を作る述語句は [+状态的] である。

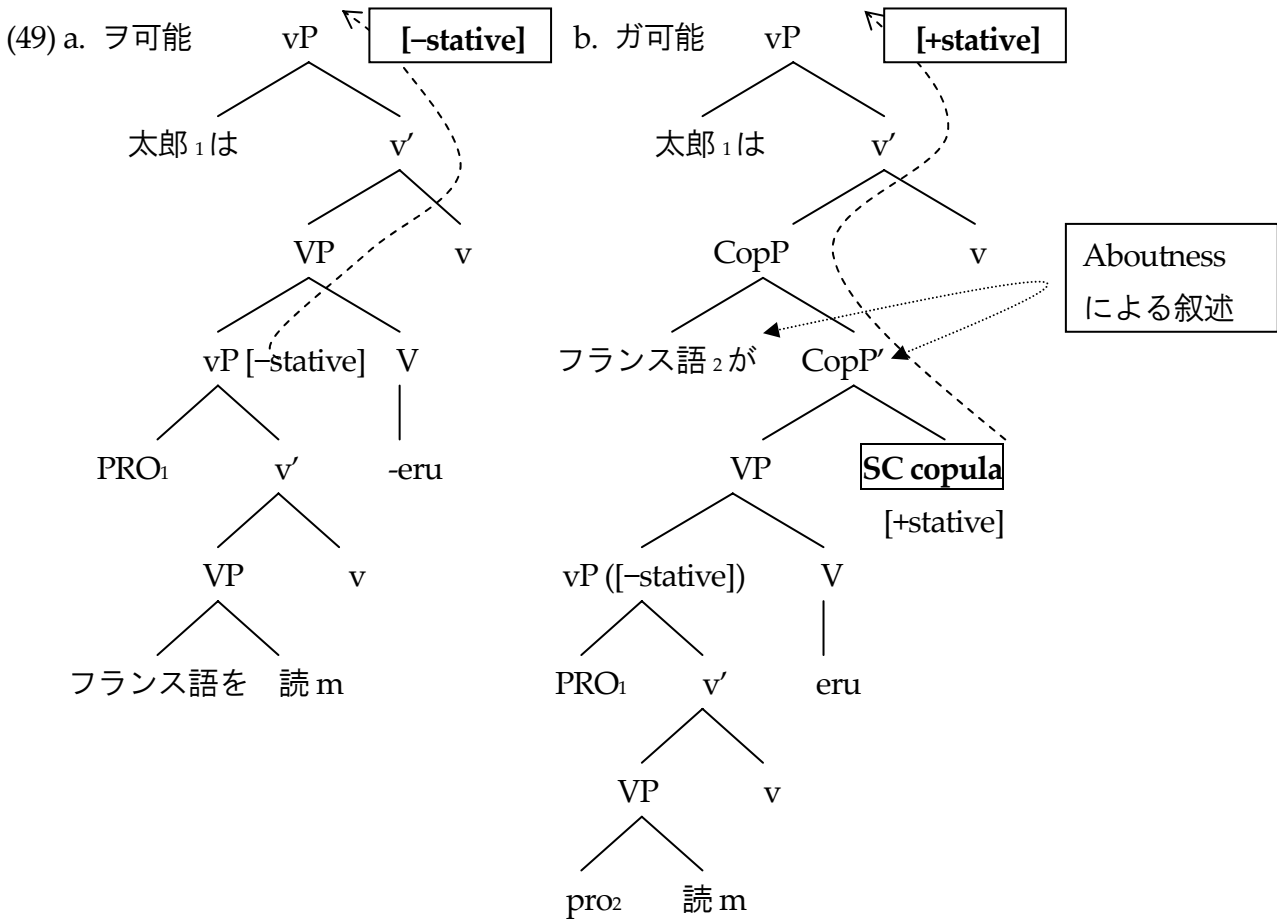
⁷ Hiraiwa (2007) は、「モ」が X⁰ に付加すると見なしているが、本発表では XP 付加とし、モは XP に支配される全ての要素を支配すると考える。Cf. Kuroda (1965 [1979])。)

-提案

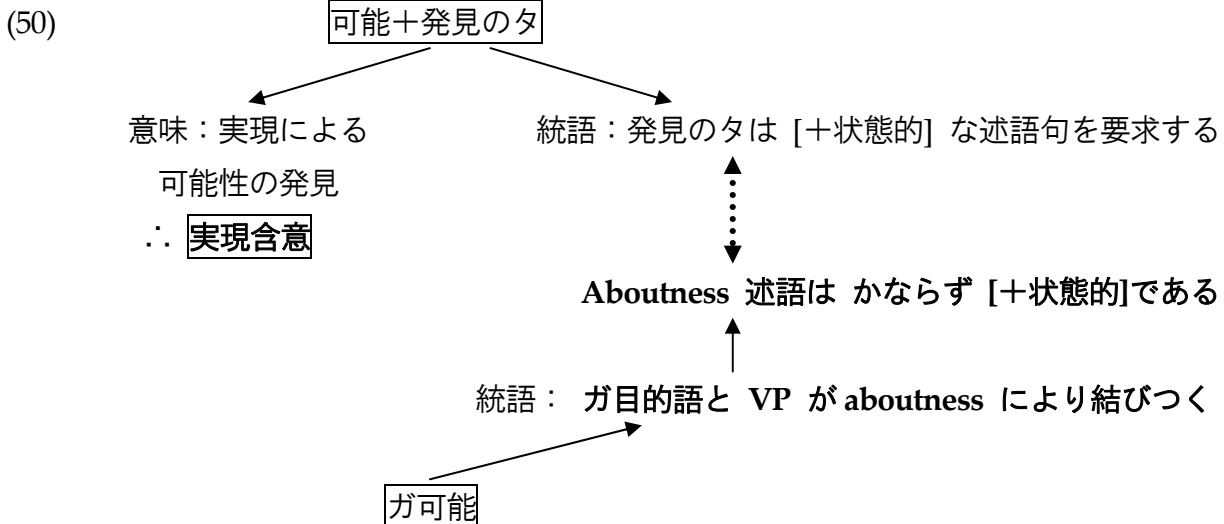
(48) a. ガ可能： ガ目的語と aboutness 叙述関係を作る述語句は かならず [+状态的] である。
 → [仮] 可能動詞句が音形ゼロのコピュラとマージして述語句全体が[+状态的] となる。

(cf. Hale and Keyser (2002))

b. 可能の助動詞 *-(rar)eru* 自体に状態性の素性はなく，下位の述語の素性が浸透することで全体の状態性が決定される。



-まとめ



5. 予測

5.1. 予測 A

(51) a. 発見のタが現れる可能文において、ヲ可能が使えないのは、*-(rar)eru* の選択する動詞句が [-状态的] であるためである (cf. (49a))。

b. 予測：動詞句が [+状态的] ならば、ヲ可能と発見のタは共起できる。

↓

正しい予測である：

(52) a. ??昨日のコンサートで [素晴らしい演奏を 聴k]-e た。

b. 昨日のコンサートで [素晴らしい演奏を 聴いてい]-られ た。

(53) a. ??試しにやらせてみたら、太郎は [何本でも 論文を 読m]-e た。

b. 試しにやらせてみたら、太郎は [何本でも 論文を 読んでい]-られ た。

5.2. 予測 B

- 「叙想的なタ」のうち、「確認のタ」は [-状态的] な動詞句に付くことができる。

(54) a. [油絵をお描きになりました]-た ね？

b. [お名前は何とおっしゃいました]-た？

(三上 (1953 [1972: 226-227]))

(55) a. [キリンってたしか、鳴い]-た よね？

b. (受験生2人の1人がもう1人に) ねえねえ、[引力て、距離の2乗に反比例し]-たっけ？

(定延 (2004: 39))

(56) 予測：「可能+確認のタ」においては、ヲ可能が容認される。

↓

正しい予測である：

(57) a. 太郎はたしか、[バイエルを 弾け]-た よね？

b. キリンって、[立ったままで 水を 飲め]-た っけ？

c. 太郎はたしか、子どもの頃は [バイエルを 弾け]-た よね？

d. 太郎って、昔は [いくらでも 酒を 飲め]-た よね？

参考文献

- 青木ひろみ (2008) 「可能表現の対象格標示「ガ」と「ヲ」の交替」. 『世界の英語教育』 18, 133-146.
- Hale, Ken and Samuel Jay Keyser (2002) *Prolegomenon to a theory of argument structure*. Cambridge, Mass.: MIT Press.
- Harada, Naomi (2002) *Licensing PF-visible formal features: A linear algorithm and Case-related phenomena in PF*. Doctoral dissertation. University of California, Irvine.
- Hiraiwa, Ken (2007) Indeterminate-agreement: Some consequences for the Case system. *MITWPL* 50: 93-128.
- 井上優 (2001) 「現代日本語の「タ」—主文末の「…タ」の意味について」. つくば言語文化フォーラム (編) 『「た」の言語学』, 97-163. 東京: ひつじ書房.
- 入江雅子 (1991) 「現代日本語の可能文におけるガ格とヲ格」. 『言語・文化研究』 9, 45-53. 東京外国語大学.
- 加藤重広 (2009) 「タ形の長期記憶参照標識機能」. 『北海道大学文学研究科紀要』 127, 1-27. 北海道大学.
- 工藤真由美 (2001) 「述語の意味類型とアスペクト・テンス・ムード」. 『言語』 12月号, 40-47.
- 国広哲弥 (1967) 『構造的意味論—日英両語対照研究一』. 東京: 三省堂.
- 久野暲 (1993) 『日本文法研究』. 東京: 大修館.
- Kuroda, S.-Y. (1965 [1979]) *Generative grammatical studies in the Japanese language*. Doctoral dissertation. MIT.
- 町田健一 (1989) 『日本語の時制とアスペクト』. 東京: アルク.
- 牧野成一 (1978) 『ことばと空間』. 東京: 東海大学出版会.
- 牧野成一 (1996) 『ウチとソトの言語学—文法を文化で切る—』. 東京: アルク (NAFL 選書 12).
- 益岡隆志 (2000) 『日本語文法の諸相』. 東京: くろしお出版.
- 三原健一 (1994) 『日本語の統語構造』. 東京: 松柏社.
- 三原健一・平岩健 (2006) 『新日本語の統語構造』. 東京: 松柏社.
- 三上章 (1953 [1972]) 『現代語法序説—シンタクスの試み』. 東京: 刀江書院.
[くろしお出版から復刻, 1972.]
- 森田良行 (2002) 『日本語文法の発想』. 東京: ひつじ書房.
- 日本語記述文法研究会 (編) (2007) 『現代日本語文法3』. 東京: くろしお出版.
- 定延利之 (2004) 「ムードの「た」の過去性」. 『国際文化科学研究』 21, 1-68. 神戸大学国際文化学部.
- 佐々木淳 (2009) 「思考動詞「思う」における埋め込み主語の主格・対格交替について」. Ms. 比治山大学. [KLS Proceedings に掲載予定]
- 柴谷方良 (1978) 『日本語の分析』. 東京: 大修館.
- 渋谷勝己 (1993) 「日本語可能表現の諸相と発展」. 『大阪大学文学部紀要』 33(1). 大阪大学.
- Tada, Hiroaki (1992) Nominative objects in Japanese. *Journal of Japanese Linguistics* 14: 91-108.

Takahashi, Hideya (2007) Predicate movement and multiple subject constructions in Japanese.

Liberal Arts 1: 21-41. Iwate Prefectural University.

高橋太郎 (1985) 『現代日本語動詞のアスペクトとテンス』(国立国語研究所報告 82) . 東京 : 秀英出版.

Takano, Yuji (2003) Nominative objects in Japanese complex predicate constructions: A prolepsis analysis. *Natural Language and Linguistic Theory* 21: 779-834.

寺村秀夫 (1984) 『日本語のシンタクスと意味 II』 . 東京 : くろしお出版.